

特集 ベンヤミンの現在

まえがき

この小特集は、2001年11月10日に開催された第45回東北ドイツ文学会におけるシンポジウム「ベンヤミンの現在」でのパネリスト報告に基づくものである。

周知のように、ヴァルター・ベンヤミンの批評作品は、第二次大戦後の思想シーンにおいて、特異な影響力をもって読まれ議論されてきた。その特異さは、何よりも彼の思想の多面性と個性的な文体によるところが大きい。当初彼は、いわゆるフランクフルト学派の一員として、つまりネオ・マルキシズムの一翼を担う思想家として登場した。しかし例えば彼の「歴史哲学テーゼ」が、図式的な史的弁証法の枠組におさまらないことは誰の目にも明らかだった。ベンヤミンとは何者なのか。そういう疑問を抱えて幾つかの著作の頁をめくり、きらめくような言葉の断片に魅了されながらも、その圧縮された思考表現の筋道をうまく追うことができず、開きかけた本をまた閉じてしまう。そういう経験を繰り返した読者は多いのではないだろうか。私もそのひとりだった。

歴史哲学、言語論、文学評論、メディア論、政治思想、更にはユダヤ的思考様式、それらが密接に絡み合いながら、ベンヤミンの繊細で複雑な批評言語を織り上げている。「根源」とか「今」とか「夢」といったカテゴリーは、その重要な織筋をなす。無内容な宣伝文句として要約すれば、そういうことになるだろうか。しかし、シンポジウムの際も強調されたように、重要なのは訓詁学ではなく、言わば「精神のリレー」である。彼が今日のメディア状況の中にいたら、知覚変容についてどのように再説したか。グローバリズムが強いる均質な時空に対して、ベンヤミン的な根源や瞬間性はどのような「別の」展望を切り開くのか。おそらく不断にそうした設問へと人を誘うところに、ベンヤミンの本領がある。彼は、忘れようとして忘れることのできない一種の悪夢のような思想家なのである。

実際、9月11日のニューヨークの「廃墟」を目の当たりにして、ベンヤミンの歴史の天使を想起した者は少なくないに違いない。未来がますます不透明化する中で、ベンヤミンの思考のアクチュアリティが、あらためて実感される。これは決して幸福な事態ではないが、時代について熟考するための

モデルを残してくれたという点で、われわれがベンヤミンに負うものは大きい。現在の文脈から彼の思想を読み直し語り直すという困難な課題に対して、それぞれの視点から時宜を得た応答を寄せていただいたパネリストの方々には、この場を借りて感謝の意を表しておきたい。(森本浩一)